

平成二十九年

快晴の元旦

初富士の左肩より明けにけり

咲子の喪中

服喪朝賀状三枚来たりけり

末節に重き添書ある賀状

正月風景

数の子を噛みて飲み口新たなり

アンダンテ 歩くような速さで

弾き初めのアンダンテちと千鳥足

正月の入り日心地西に寄り

梅園付近

こはもての道祖神にも飾餅

人気なく黒き猫ゐて寒の梅

上階の高校生 よその娘は早い

初化粧の残り香のありエレベーター

三極の花

銀鼠を割りて三極黄の花冠

三極の花つまびらか目の高さ

ベランダ

雪の富士影のみ映し雲の行く

路地

白梅も枝の整ふ裏通り

徒長枝に一行の梅紅ほのか

香箱に蹲る（うづくまる）猫寒の路地

神奈川工科大学

図書館の前そこここに卒業生

高校入試の日

土手道をうつむき歩む入試の子

上階の娘たち

隣家の娘ルージュをひきて卒業す

辛夷の花を真下から見ると

辛夷咲く蒼天に舞ふ紙吹雪

春一番 東南が開いているので風当りが強い

水掛論止めし外には春の風

春一番物干竿は陽に揺るる

桜咲く

花冷えやハヤシライスの匂ひして

花の陰猫が三匹目を細め

御殿場線の思い出

長停車花吹く風の車内抜け

門出の季節

制服のボタン輝く新入生

マドンナの香水が変わった

隣家の娘香りおとなへ春の朝

春浅し

清明や銭湯出でて手に帽子

軽塵の光りに遊び春浅し

四月十日 浅田真央引退表明

銀盤の伝説となる日花吹雪

四月十四日 箱根仙石原吟行

うぐひすのややぎこちなし箱根道

巻貝の歩みし跡や水ぬるむ

春の池稚魚の揃ひて泳ぎけり

水芭蕉向き各々に並びをり

四月一七日 房総半島旅行  
鋸山

百尺噴き上ぐ地獄覗きや若葉風

千倉温泉

卯波たつ雨に打たれて露天風呂

大多喜町

朝採りと講釈を添へ筍膳

御城下の最中の幟春の風

新羽緑道

水車飛沫も声もこどもの日

裾野山荘

須山街道

山里の風や新茶の幟旗

庭の山椒の木

鼻奥に香の衝き当たる青山椒

含め煮の丹塗りの椀の木の芽かな

覚醒す存分伸びて蝸牛

郭公の木霊す富士の藍まだら

箱根

山法師箱根は富士に入日かな

代々木公園 薔薇の写真を撮る男性

強面の膝折りて撮る白き薔薇

二子玉川

テラス席にフオアグラの滋味新樹光

六月二十三日 三溪園吟行

午後の日のそよとも吹かず合歓の花

虎の尾の向きてんでんに塔の下

金欄の花嫁の寄る花菖蒲

未草花の並びの謎めきぬ

マドンナと会う ハワイ帰りといふ

日焼けして腕輪の跡も艶めかし

何やら凄し

蟻の列空家の門の下に消ゆ

裾野山荘

引き出しに見つく手火花宵いまだ

軽やかに木々訪うて舞う黒揚羽

つむじ風黒き揚羽の影迅し

帰り道東名高速で豪雨に遭う

八月や車軸の煙る高速道

大倉山 季節はめぐる

熊蟬の鳴き止みし町油照り

熊蟬の隆盛極む日は宙に

腹ばひの老犬の目に夏深し

忽然と空に弦月現れり

切り花の朝顔白し昼下がり

丸ごとの西瓜ぶら下げ甥来る

朝顔の色を書きおく荷札もて

新涼の洗ひしカーテン掛けにけり

高階に秋知るはまず空と雲

曇空木犀盛りまとひつき

野分後の三重の笠雲富士焼けり

隠れなく朱の珠揺るる柘榴かな

十月の朝たなごころ小糠雨

郊外

田の神の此処に居残る神無月

オクトーバーフェスト

十月やビール祭りのハマの風

十一月二日 井の頭公園吟行  
中田喜直歌碑

日和得て「小さい秋」の碑に落葉

老夫婦

山茶花の小道や二人手を繋ぎ

甘い香り

散り敷いて桂落葉はガトウの香

大倉山 晩秋初冬

切り口も鋭利にセロリ蒼き皿

黒雲や残光集め黄の銀杏

おつもりと取寄せ蜜柑二つ割り

黄の羽根の柔らかに揺れ冬の蝶

水鳥の翼の裏を朝日射る

師走

遠富士は雲無しけふの蒲団干

サイレンも車列に埋もる師走かな